

## 飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

### 第 322 回 日本人の美学「地味このみ」

2009.7.26

先日 58 回目の誕生日を過ごした。「人間五十年、下天のうちを比ぶれば夢幻の如くなり、一度生を享け、滅せぬもののあるべきか」これは、織田信長お気に入りの「敦盛」であるが、ほんの少し前、例えば明治・大正時代の平均寿命は 39.5 歳、戦前の昭和 10 年で 48 歳、「団塊の世代」が生まれた昭和 22 年ですら 52 歳の寿命だった。してみると、もう随分永く、生きてきたものである。

永く生き過ぎたせいか、最近やたらと「日本人」に拘ったりしている。何で日本人なのか、どこが日本人なのか、日本人って何なのか？...実にどうでもいい「こだわり」が抜けきれないでいる。

今回もそのひとつ、日本人の「地味好み」について考えてみたい。日本人と言うのは世界的に見ても珍しい「地味」を愛する一面を持っていると思う。

例えばこの言葉...「花は盛りに月は隈なきを見るものかは」...徒然草の一説である。「花は満開の状態、月は満月だけが本当に良いのだろうか、いや決してそうではない」と言う意味だろう。

花が散りゆく時や、月が欠けゆく時の儂さや切なさ、そういった感情もとても素敵なものだという価値観。恐らく他の諸外国（民族や宗教）には存在しない見方かもしれないと思っている。日本人の「地味」を愛する性格は、豪華でないこと、華やかでないこと、完全でないことに美を見出したりするのである。つまり、完全でないことの素晴らしさを、かつての日本人の美意識として、会得していたとって過言でない。

ひょっとしたら、この美学を具現化したものが「茶道」かもしれない。

茶道の根本思想のひとつに「侘び寂び」がある。この言葉を説明するのは、本当に難しいことだが、「侘び寂び」は言ってしまうと「地味」の美学とすれば、何となく分かったような気がしてくる。必要でないものを全て削ぎ落とした、完璧なまでの単純素朴の美しさ。自然を愛し、自然な姿を求めるありのままの心。今在ることに感謝し、時の移ろいを肌で感じる姿勢。虚飾を全て捨て去ってそこに残る清らかな美しさ、こんなすべてを内包する価値観が「侘び寂び」なのかもしれない。宝飾を万遍に散りばめた絢爛たる巨大宮殿よりも、控えめに、しかも無造作に作られたものにこそ、真の美しさがあることを知り得るのは、「詫び寂び」を尊ぶ日本人の至高の美学とっていい。

「侘び寂び」の心は、本来、日本人なら必ず持ち合わせているはずの精神だ。それが今、多くの日本人がつい、忘れがちになってしまっている。一体何時から、そうってしまったのだろうか？

次々に進出した外資系シティタイプホテル。煌びやかに輝く、圧倒的でゴージャスなアナトリウム（吹き抜け）に、多くの日本人は驚愕した。「こりゃ凄い」とばかり、日本中の大型旅館が、その建築設計の中に、この巨大なる豪華空間を導入した。地方の温泉観光地、そのど真ん中に平然とアナトリウムが出現した。実は、この時点ですでに「旅の館」は消え去ったこと、気付くべきだった。脈々と続いてきた旅館の歴史と、その根底を形成する日本文化とも言うべきものが、この華麗なるシャンデリアのもとに一掃された瞬間だった。

明治以来、富国強兵、目指すは欧米列強諸国と、必死にがんばり続けた日本人が、世界に類無き高度経済成長を成し遂げ、やがて列強諸国に辿り着き、そして追い越しまでした結果が今だとすれば、日本人が本当に目指したものは、果たして何だったのだろうか？政治や経済、教育や文化、そして人間としての価値観すらアメリカナイズされた現在、永い歴史と重厚なる伝統から生まれた日本人の美学までが、失われつつある。「日本人の誇りを捨ててまで求めたもの、本当にこれで良かったのか...」、真面目で真剣な検証をすべき時にある。そう思い込んだ以上、また、「日本人とは何か」を追求していきたくなる今日この頃である。